



事は職人がやってるんですよ」

実際、量産化前の難しい製品や試作品を形にするのが、小山さんの役割でもある。

「今でも大型のレンズやプリズムなどの多面体は手で磨きます。究極は実は平面で、これが非常に難しい。もっとも、『難しい』は私にとっては、『面白い』なんですけどね」

職人という言葉から、頑固者や

分らず屋を思い浮かべるのは間違いだ。優れた職人は、例外なく柔軟で好奇心旺盛である。工夫なしには技術は決して進歩しないのだから。

「まだできることがあるんじゃないかも」と楽にできるんじゃないかって常に考えてます。つらい仕事はやりたくないですから、できませんとって言ったところで終わり。だ

から工夫するんです。失敗は数え切れないですよ。でも、私は怒られても『コンチクショー』とは思いません。どんなことでも、教えてくれる人は、私にとってはみんな神様なんです」

最先端技術は、設備投資よりも研究開発よりも、職人の謙虚さと向上心に支えられているのかもしれない。

PROFILE

小山 美範

昭和24年、埼玉県大宮市生まれ。中学卒業後、通勤が楽だからという軽い気持ちで富士写真光機に入社。加工部へ配属され、以降レンズ加工に歩む。従来ツールを使っていたレンズと皿の固定法を、新するなか、画期的な工程改良を次々と実現。昭和50年、光学ガラス研磨技能士二級。平成8年には同特級を埼玉県で初めて取得。平成13年度、現代の匠一に選ばれる。



職人の技

シリーズ

光学レンズ研磨工

「磨く」という技術には不思議な魅力がある。コシコシとした濁った塊が、磨かれ、なめらかに光沢を持つていく。その過程に、どこか神聖さを感じるのだ。そんな憧れの職人に会いに行つた。レンズを磨く、現代の名工である。

● レンズ生産量日本といわれる埼玉県で、40年間、レンズを磨き続ける職人がいる。光学ガラス研磨技能士特級を持つ小山美範さんだ。「面白いですよ」この仕事は、ただのガラスの塊が、レンズになっていく。最近ではデジタルカメラ用とか、新しい要求が次々来る。楽しくて仕方ないですよ。」

かつてレンズは、職人が手で削っていた。ガラスの塊を切断し、粗摺り、砂掛けによる鏡面づくり、焦点を決める芯取り、そして仕上げ研磨とすべてが手作業だった。

「でも今は、機械で磨くのが大前提です。手磨きは格好良さそうだけど、どうしても職人のクセが出てしまつ。芸術品ならともかく、工業製品にクセや個性は不要なんです。仕事場を見せてもらおう。そこでは半円形の多数の皿が、茶色いほげ液体を浴びながらグルグルと回転していた。」

「これは砂掛けという工程です。この皿は、鋳物製。レンズを一方の皿に固定して、凸または凹の皿を使ってアルミの粉などを含む水をかけながら磨いていくのです。」

「この工程で、レンズの中心厚と曲率を、最終スベック近くまで削り込んでいく。たとえば、1ミクロン曲率が狂つくと、仕上げ磨きの時間が倍になってしまつ。それだけの精度が要求される工程だ。それにしても、直径20mmのレンズで、約30分。機械が淡々と磨いていく。1日にクセの

入り込む余地があるのだろうか。そう問つて、小山さんはほほえんだ。「この機械の動きは、職人の磨き方を真似てるんです。私が手で磨けば、違う動きになります。それと、皿の調整がね、手作業なんです。鋳物工場から納品された皿は、まず砥石で削つて整えます。レンズを4〜5枚磨くと皿は狂つてきますので、また削ります。微妙な手触りを頼りに1ミクロン単位で調整する。納得できる皿削りができるまで、10年はかかりますね。」

単調に見える機械の動きの陰には、熟練した職人が潜っていたのが、量産化していつのはつまりは職人の技術を機械にマネさせること。だからその時代のいちばん先端の仕

富士写真光学機株式会社
光学ガラス研磨技能士
レンズ加工部
小山美範さん

私のキーワードは「楽をしたい」。
ラクするために、工夫し続けるんです。

文＝篠塚義成
text: Yoshinari Shinozuka
写真＝林泉
photo: Izumi Hayashi